

## リレー随想(25)

## 西穂を記憶する

深志21回卒 鈴岡 潤一

今年も無事に降りてこられた…。それが最近の西穂登山後の実感である。体力の衰えは年を経るごとにはっきりしてきている。

なぜ、今、西穂に登るのだろう。

33回忌に多少の呼びかけをし、卒業40年には34人の同期生が山上に集った。不思議なことに、同期生たちは、みな当事者意識を共有している。「私もそこにいた一人だったかもしれない」という意識である。(以下、引用は『42年目の独標』2009刊から)

登っていなかったのに、いつも思ってしまった「なぜ、私が生き残ってしまったのか」という苦しみは以前ほどは無い。けれど、涙は溢れてしまう。(牧野恵子)

独標の標識を見、其処に立った時、込上げる涙を止めることは出来なかった。…私は合宿が有ったため、第1班から第2班に変更をお願いしていた。本来ならば落雷事故に会ったメンバーの1人になっている筈であった。…家族、親族、友人、社会そして運命に生かして貰って初めて生きる人生なのだと思う。私は運命的に生かされたと感じ、彼らの分もこれから生きていこうと感じた。“友よ安らかに眠れ”——長年の思いの気持ちの整理が付いた追悼登山であった。(白木建太郎)

42年前の集団登山に…郷友会のキャンプ、常念岳登山があり参加しませんでした。…50代後半になりやり残した事は何かと考えるといつも独標のことが浮かんできました。…追悼登山の連絡をもらい全てに優先して行くと決め参加させて貰いました。(青柳 和比古)

こんな方たちも居る。



台状の山が独標

いつかは慰霊に登りたいとずっと思っていました。私も子供を亡くして十年がたちます。が、拭いきれない喪失感、心の痛みは続いたまま、むしろ、時を経るにつれ、年をとるにつれ、悲しみは、深いところで大きくなっているようにさえ思います。当時の、そして今に至る御両親様方のそのような思いは如何許りであろうかと、一層御両親様方への思いを深くしております。(安藤由喜子)

あの日は、演劇部の合宿で、登山は諦めて練習に参加していました。でも、その年のとんぼ祭をどうするのか、練習していた戯曲は「みんな我が子」。母親に息子の死を伝える場面がでてくる……。やっというのか？ 遺族の方々はどう思われるのか……。みんなで何回も話し合ったことなど思い出します。…久しぶりの同期のみなさんとの再会。それぞれが40年の年を経てこうして同じ目的で一緒に行動した今回の追悼登山。私も長年の心のつかえがとれ、少し軽くなりました。(富山素美)

学生時代に山岳部に入り、夏は何時も北アルプスのどこかにいたのは、落雷で亡くなられた仲間のそばにいたかったからかもしれない。…あの時伝令に西穂山荘に走ってからは、今までずっと走り続けてきました。…再度救助に向かい、独標の頂上で心臓マッサージ、人口呼吸などずっと続けていたが、ついに戻ってきませんでした。(遠藤豊)

西穂独標へ登ったのは、これが2回目。1回目は32年前。私が26歳の時だった。新聞記者(信濃毎日新聞)になって、それまで登らなかつた西穂独標に「仕事」として登った。…西穂山荘では山荘のおやじ村上守さんに取材した。

その翌日、私は独標で写真を撮るために「追悼する人」を待った。私が独標に着いたときには、誰が供えたのか、花が置かれていた。そうこうしているうちに会ったのが、毎年、慰霊登山を欠かさない小林俊樹さんだった。…なかなか書けなかつた…亡くなった仲間たちのことを思うと、記事を書くことが何を意味するのか。自分自身は何なのか。山荘のおやじの「証言」も重く、その夜はただただ飲み明かした。…8月1日は自分自身の「生」を見つめ

る日でもある。(大西健文)

40年前のあの日のことは、思い出すということではなく、いろんなことが鮮明に脳の中にある。私はバテ、西穂山荘で本隊を待っていた。すごい雨となり、山荘に皆避難をしている中、柳原先生が、すごい勢いで駆け込んで来られ救助を訴えた。皆が登っていった。柳原先生も来た道を即、折り返し登っていかれた。その駆け下り駆け上っていった急斜面を、先生の気持ちをかみ締めながら登る。独標は、いつ行っても悲しい場所だ。今年、やっと8月1日に慰霊をすることができた。当日、在校生の山岳部の子たちも登ってきてくれた。本当に若いかわいらしい子たちだった。40年前の11人の若さを思った。(長森 恵)

…4年前から独標に登ることにした。昔のことを思い出したり、今年はこんな事があった、来年はこうしよう、などと色々なことを考えながら、一步一步独標への道を辿ることで、11人との対話を楽しんでいるこの頃の私である。(百瀬修平)

毎年登っている方も、初めて登った方もいらっしゃいましたが、追悼の気持ちは年毎に深まるようで、独標では、「あそこが〇〇君の位置だから……」との声に、その時に引き戻されたように、胸を衝かれました。ご遺族の方々や先生方の年齢になったときには改めて、彼らを惜しむ気持ちが新たになったと感じたものでした。(森野由紀)

私が最初に「慰霊」として登ったのは、1980年である。西穂山荘には当時お世話になった旨告げると、ご主人は毎年8月1日に登っておいでの小林俊樹先生を引き合わせてくれた。先生と私は、8月2日早朝に、お目にかかっている。救助隊の最初のお一人としてである。

「コバチャー行くじゃん…」昭和42年8月1日午後8時過ぎ、そんな呼びかけで、私を軽トラックに乗せた二木計臣(かずおみ)君の一声が、その後続く独標参りの始まりだった。

深夜…1時半には三々五々、西穂山荘への登りについで。その多くは無言だったが、一つだけ今でも覚えているのは、何人かの遺体を背負い下ろすことの難しさのやりとりだった。ヘリコプターは遺体を運ばない、というのは当時の常識だったからだ。…

西穂山荘の朝まだきは、まさに地獄絵だった。その中で山荘主村上守さん

だけが、厳しく的確に、屋内を取り仕切っていた。…救援に駆けつけたOBといえども、初対面者が多い。歳の差もあり、山歴も違う。…二木君と若手大学山岳部員たちは、独標周辺の遺体収容を担当することになった。私は刻々と変わる事実の記録と、西糸屋本部との情報連絡に当たった。電話のほとんどは、取材報道陣の定時予約に奪われ、学校当局…との連絡もままならなかった。…

すでに周知のことだが、時の防衛庁長官増田甲子七氏(松中37回)指示による、三重県明野(陸上自衛隊航空学校)からのヘリコプター2機の出動と、松本駐屯部隊・千葉二尉以下三十数名のレンジャー隊が、怪我人や遺体の搬送の大方を引き受けてくれた。…山荘前の臨時ヘリポートからは、岩井二佐率いる2機が、交互に重軽傷者をピストン輸送してくれ、千葉二尉以下が、担架で運んでくれた8遺体は、1時間弱で空輸して終わった。その間の岩井二佐と私の対話? を記しておく。

岩井「遅くなりましたが、ただいま到着しました」私「ご苦労さま、大変でしたネ…、ところで…」(暫く両者無言。)私「ところで…遺…」この言葉を打ち消すように、岩井二佐は挙手の礼をしたまま、「長官命令!何でもやります…」こう明言してくれた、そのときの記憶は、今でも明確によみがえる。

以来…まだ私は独標参りを続けている。何故だかは、自分にもわからない。…同行する人々の顔ぶれも、ずいぶんと若くなった。卒業生ばかりでなく、現役の諸君の数も随分と増えた。犠牲者の同年生も年ごとに数を増した。

(「独標 42年」 小林俊樹 深志4回)

時間の経過につれて、真夜中になっても、遠くから続々と多くの人が集まって来る。…卒業生や…山岳部OB…。実に伝統ある母校愛と、後輩への愛情が、各々年齢の差はあっても、これ程までに多勢の人々に引き継がれているのかと思って、なんとも頼もしかった。…山荘に到着した卒業生のうち、遺体運搬のためまず十二名が独標まで登って待機することにした。独標の上には、いたいけな生徒の遺体が、所せまく収容されている。…間もなくして、転落して行方不明となっていた三名は、同じ場所に折り重なるようにして遺体で見えられた。ハイマツを切って作った芝ゾリに遺体を収容し、…岳沢を下ろすことにした。…

独標から急な一カ所…山荘の村上守

さんが独標での陣頭指揮を取ってくれている。三角形の背負い子が三つ用意された。固定のメインロープを片手に握り、片手で岩をつかみ、徐々にゆるめてくれる確保用のロープが、いっばいになるところまで降りる。…平坦部では、自衛隊のレンジャー部隊員が、背負い子から遺体を外し、担架に収容してスムーズに山荘前のヘリポートまで運んでくれた。

(「深志落雷遭難記」二木計臣 深志5回・山岳部OB)

2007年は、西穂の40年目にあたり、信毎・市民タイムスが同行取材を行い、関連記事が掲載された。とんぼ祭に発表された漫研の三年生の瀧澤輝己作『蜻蛉ヶ丘に』である。記事の末尾にそつと書かれた「残部若干あり」という一言が波紋を呼んだ。その日の朝から電話がひっきりなしにかかる状態となり、作品の増刷に及んだ。作品が約200人を結びつけた。読後感もいくつか返送された。次のようなものもある。

「…命について考える時間を与えてもらいました。生きていることは当たり前ではないこと、すごいことだということ。…日々頑張って、生かされていることの素晴らしさをかみしめて過ごしてください。…私も自分を愛して、大切に生きてゆきます。」

こうしたことが起こるのは、あの事故が、まだ「生きている」からである。深志高校の慰霊碑には、毎月1日には、新しい花が添えられている。遺族の方々が、月命日として慰霊に訪れている。

思うに、独標が私を誘うのは、そこがたぶん私の第三の誕生の地だからである。

とりあえずは進級したものの、学ぶことそのものが思うような自信につながらず、なにができるのか、何をしたいと思えているのか、要するにお前は何者なのか、という類の煩悶が私を襲っていたのである。文学青年だった故田村吉司君とは、山に登ることについて、そんな風な会話をした覚えがあるのだ。そうした煩悶を抱えて私は西穂に登ることを希望した。ある意味の自己確認の場所が私にとっての西穂・独標だった。あるいは、高校2年生という時期はそういうことを考える時期だった。

落雷の瞬間は私には記憶がない。倒れた北側の最低鞍部上を流れる冷たい雨水に背中を洗われ、着ていたビニー

ルのボンチョに当たる雷の音のなかで目覚めた。横内先生や上條君、中村君に保護されながら、独標の北側のほんの少し上がった場所に坐ってぼんやりしていた。死者が出る状況に直面したことと、ともあれ私はいま生きているのだということを経過とともに実感したのだらうと思う。時間の経過は、雨が上がり西の空が真っ赤に染まったことが示している。—これも記憶の改変かもしれないとあまり自信がなかったが、先日の山上で、みな「夕焼け」を口にしたので、ようやくにして、確信がもてた。

こうしたことを思い出してみると、西穂・独標とは、私にとっては、11人の彼らが今もそこにいる場所なのである。それも、当時のままの彼らがそこにいるのである。だから、時には「何やってるんだ、お前」という罵声であったり、「しっかりしろよ」という励ましであったりする。

雷撃は私の背の中ほどから入り足指の爪の成長能力に損傷を与えている。だから、生まれたばかりの子ども小さい手と華奢な指がとていとおしく感じられたことを鮮明に思い出せる。無事に生まれたその長男が17歳になるうとした年次の始めに、「親父と同じ歳になったから西穂に行く」と言い出したときにはとても驚き、またうれしかった。「西穂のこと」についてまじめに子どもたちに話した記憶がなかったからでもある。次男もそれに続いた。こうした家族たちが居ることに、また彼らが西穂をどこかで意識していることに、そして今ここにともに生きていられることに、改めて静かな感動を覚える。命について彼らが感じ、考えてくれていと信じられるからである。

近年、一緒に登る仲間が増えた。33回忌のときに、10人ほどが集まってからは、毎年のように顔を合わせる仲間ができた。だから、近年は山に来る意味がもうひとつ増えた。「おい、あんたもこの一年元気に過ごしたんだな。うれしいな。また来年も会おうよ。」もちろん、これは11人の仲間たちにもかける言葉である。



2009年独標での雷鳥